

黄いろのトマト

宮沢賢治

青空文庫

博物館十六等官

キユステ誌

私の町の博物館の、大きなガラスの戸棚とだなには、剥製はくせいですが、
 四疋ひきの蜂はちすずめ雀すずめがいます。

生きてたときはミイミイとなき蝶ちようのように花の蜜みつをたべるあの
 小さなかあいらしい蜂雀です。わたくしはその四疋の中でいちば
 ん上の枝えだにとまって、羽を両方ひろげかけ、まっ青なそらにいま
 にもとび立ちそうなのを、ことにすきでした。それは眼めが赤くて
 つるつるした緑ろくしやう青しょういろの胸をもち、そのりと張った胸には

波形のうつくしい紋もんもありました。

小さいときのことですが、ある朝早く、私は学校に行く前にこつちよつとそり一寸ガラスの前に立ちましたら、その蜂雀が、銀の針の様なほそいきれいな声で、にわかになりに私に言いました。

「お早う。ペムペルという子はほんとうにいい子だったのにかあいそうなことをした。」

その時窓にはまだ厚い茶いろのカーテンが引いてありましたので室へやの中はちようどビール瓶びんのかけらをのぞいたようでした。ですから私も挨拶あいさつしました。

「お早う。蜂雀。ペムペルという人がどうしたつての。」

蜂雀がガラスの向うで又また云いいました。

「ええお早うよ。妹のネリという子もほんとうにかあいらしいいい子だったのにかあいそうだなあ。」

「どうしたていうの話しておくれ。」

すると蜂雀はちよつと口あいてわらうようにしてまた云いました。

「話してあげるからおまえは鞆かばんを床ゆかにおろしてその上にお座りすわ。」

私は本の入ったかばんの上に座るのは一寸困りましたけれどもどうしてもそのお話を聞きたかったのでとうとうその通りしました。

すると蜂雀は話しました。

「ペムペルとネリは毎日お父さんやお母さんたちの働くそばで遊

んでいたよ〔以下原稿一枚？なし〕

その時ほく僕も

『さようなら。さようなら。』と云つてペムペルのうちのきれいな木や花の間からまつすぐにおうちにかえつた。

それから勿もちろん論小麦も搗ついた。

二人で小麦を粉にするときは僕はいつでも見に行つた。小麦を粉にする日ならペムペルはちぢれた髪かみからみじかい浅黄あさぎのチヨツキから木綿もめんのだぶだぶずぼんまで粉ですつかり白くなりながら赤いガラスの水車場でことごとやっているだろう。ネリはその粉を四百グレンぐらいずつ木綿ふくろの袋につめ込こんだりつかれてぼんやり

戸口によりかかりはたけをながめていたりする。

そのときぼくはネリちゃん。あなたはむぐらはすきですかとか
らかったりして飛んだのだ。それからもちろんキャベジも植えた。
二人がキャベジを穫とるときは僕はいつでも見に行つた。

ペムペルがキャベジの太い根を截きつてそれをはたけにころがす
と、ネリは両手でそれをもつて水いろに塗ぬられた一輪車に入れる
のだ。そして二人は車を押おして黄色のガラスの納屋なやにキャベジを
運んだのだ。青いキャベジがころがってるのはそれはずいぶん立
派だよ。

そして二人はたった二人だけずいぶんたのしくくらししていた。」「
おとなはそこらに居なかつたの。」「わたしはふと思ひ付いてそ

うたずねました。

「おとなはすこしもそこらあたりに居なかつた。なぜならペムペルとネリの兄きょうだい妹いまいの二人はたった二人だけずいぶん愉快ゆかいにくらしてたから。

けれどほんとうにかあいそうだ。

ペムペルという子は全くいい子だったのにかあいそうなことをした。

ネリという子は全くかあいらしい女の子だったのにかあいそうなことをした。」

蜂雀は俄にわかにだまってしまいました。

私はもう全く気が気でありませんでした。

蜂雀はいよいよだまってガラスの向うでしんとしています。

私もしばらくは耐えて膝を両手で抱えてじつとしていましたけれど、あんまり蜂雀がいつまでもだまってるもんですからそれにそのだまりようと云ったらたとえ一ぺん死んだ人が二度とお墓から出て来ようたって口なんか聞くもんかと云うように見えませんでした。どうとう私は居たたまらなくなりました。私は立つてガラスの前に歩いて行って両手をガラスにかけて中の蜂雀に云いました。

「ね、蜂雀、そのペムペルとネリちゃんどがそれから一体どうなったの、どうしたって云うの、ね、蜂雀、話してお呉れ。」

けれども蜂雀はやっぱりじつとその細いくちばしを尖らしたまま

ま向うの四十雀しじゆうからの方を見たつきり二度と私に答えようともしませんでした。

「ね、蜂雀、はな談してお呉れ。だめだい半分ぐらい云っておいていけないったら蜂雀

ね。談してお呉れ。そら、さっきの続きをさ。どうして話して呉れないの。」

ガラスは私の息ですつかり曇くもりました。

四羽の美しい蜂雀さえまるでぼんやり見えたのです。私はどうとう泣きだしました。

なぜって第一あの美しい蜂雀がたった今まできれいな銀の糸のような声で私と話をしていたのに俄かに硬かたく死んだようになって

その眼もすつかり黒い硝子玉ガラスだまか何かになってしまいいつまでたつても四十雀ばかり見ているのです。おまけに一体それさえほんとうに見ているのかただ眼がそっちへ向いてるように見えるのか少しもわからないでしょう。それにまたあんなかあいらしい日に焼けたペムペルとネリの兄妹が何か大へんかあいそうな目になったというのですものどうして泣かないでいられましょう。もう私はその為ためならば一週間でも泣けたのです。

すると俄かに私の右の肩かたが重くなりました。そして何だか暖いのです。びつくりして振りふりかえって見ましたらあの番人のおじいさんが心配そうに白い眉まゆを寄せて私の肩に手を置いて立っているのです。その番人のおじいさんが云いました。

「どうしてそんなに泣いて居るの。おなかでも痛いのかい。朝早くから鳥のガラスの前に来てそんなにひどく泣くもんでない。」
けれども私はどうしてもまだ泣きやむことができませんでした。
おじいさんは又云いました。

「そんなに高く泣いちやいけない。

まだ入口を開けるに一時間半も間があるのにおまえだけそつと入れてやったのだ。

それにそんなに高く泣いて表の方へ聞えたらみんな私に故障を云って来るんでないか。そんなに泣いていけないよ。どうしてそんなに泣いてんだ。」

私はやつと云いました。

「だって蜂雀がもう私に話さないんだもの。」

するとじいさんは高く笑いしました。

「ああ、蜂雀が又おまえに何か話したね。そして俄かに黙り込だまんだね。そいつはいけない。この蜂雀はよくその術をやって人をからかうんだ。よろしい。私が叱しかつてやろう。」

番人のおじいさんはガラスの前に進みました。

「おい。蜂雀。今日で何度目だと思う。手帳へつけるよ。つけるよ。あんまりいけなけあ仕方ないから館長様へ申し上げてアイスランドへ送つちまうよ。」

ええおい。さあ坊ぼっちゃん。きつとこいつは談はなします。早く涙なみだを

おふきなさい。まるで顔中ぐじやぐじやだ。そらええああすつか

りさつぱりした。

お話がすんだら早く学校へ入らっしゃい。

あんまり長くなって厭あきつちまうとこいつは又いろいろいやなことを云いますから。ではようがすか。」

番人のおじいさんは私の涙を拭ふいて呉れてそれから両手をせなかで組んでことりことり向うへ見まわって行きました。

おじいさんのあし音がそのうすくらい茶色の室へやの中から隣となりの室へ消えたとき蜂雀はまた私の方を向きました。

私はどきつとしたのです。

蜂雀は細い細いハアモニカのような声でそつと私にはなしかけました。

「さつきはごめんなさい。僕すっかり疲れ^{つか}ちまつたもんですからね。」

私もやさしく言いました。

「蜂雀。僕ちつとも怒^{おこ}つちやいないんだよ。さつきの続きを話してお呉れ。」

蜂雀は語りはじめました。

「ペムペルとネリとはそれはほんとうにかあいいんだ。二人がガラスのうちのの中に居て窓をすっかりしめてると二人は海の底に居るように見えた。そして二人の声は僕には聞えやしないね。」

それは非常に厚いガラスなんだから。

けれども二人が一つの大きな帳面をのぞきこんで一所に同じよ

うに口をあいたり少し閉じたりしているのを見るとあれはいっしょ一緒に唱歌をうたっているのだということは誰たれだつてすぐわかるだろう。僕はそのいろいろにうごく二人の小さな口つきをじつと見ているのを大へんすきでいつでも庭のさるすべりの木に居たよ。ペムペルはほんとうにいい子なんだけれどかあいそうなことをした。ネリも全くかあいらしい女の子だったのかあいそうなことをした。」

「だからどうしたつて云うの。」

「だからね、二人はほんとうにおもしろくくらしていたのだから、それだけならばよかつたんだ。ところが二人は、はたけにトマトを十本植えていた。そのうち五本がポンデローザでね、五本がレ

ツドチエリイだよ。ポンデローザにはまつ赤な大きな実がつくし、レッドチエリーにはさくらんぼほどの赤い実がまるでたくさんできる。ぼくはトマトは食べないけれど、ポンデローザを見ることならもうほんとうにすきなんだ。ある年やつぱり苗なえが二いろあつたから、植えたあとでも二いろあつた。だんだんそれが大きくなつて、葉からはトマトの青いにおいがし、茎くきからはこまかな黄金きんの粒つぶのようなものも噴ふき出した。

そしてまもなく実がついた。

ところが五本のチエリーの中で、一本だけは奇きたい体に黄いろなんだろう。そして大へん光るのだ。ギザギザの青黒い葉の間から、まばゆいくらい黄いろなトマトがのぞいているのは立派だった。

だからネリが云った。

『にいさま、あのトマトどうしてあんなに光るんでしょうね。』
ペムペルは唇くちびるに指をあててしばらく考えてから答えていた。

『黄金きんだよ。黄金だからあんなに光るんだ。』

『まあ、あれ黄金なの。』ネリがすこしびつくりしたように云った。

『立派だねえ。』

『ええ立派だわ。』

そして二人はもちろん、その黄いろなトマトをとりもしなければ、
一寸ちよつとさわりもしなかった。

そしたらほんとうにかあいそうなことをしたねえ。」

「だからどうしたって云うの。」

「だからね、二人はこんなに楽しくくらししていたんだからそれだけならばよかったんだよ。ところがある夕方二人が羊齒しだの葉に水をかけてたら、遠くの遠くの野はらの方から何とも云えない奇体ない音が風に吹き飛ばふされて聞えて来るんだ。まるでまるでいい音なんだ。切れ切れになって飛んでは来るけれど、まるでずらんやヘリオトロープのいいかおりさえするんだろう、その音がだよ。二人は如露じよろの手をやめて、しばらくだまって顔を見合せたねえ、それからペムペルが云った。

『ね、行って見ようよ、あんなにいい音がするんだもの。』

ネリは勿論もちろん、もつと行きたくつてたまらないんだ。

『行きましょう、兄さま、すぐ行きましょう。』

『うん、すぐ行こう。大丈夫あぶないことないね。』

そこで二人は手をつないで果樹園を出てどんどんそつちへ走つて行つた。

音はよつぽど遠かつた。樺かばの木の生えた小山を二つ越えてもまだそれほど近くもならず、楊やなぎの生えた小流れを三つ越えてもなかなかそんなに近くはならなかつた。

それでもいくらか近くはなつた。

二人が二本の榎かやの木のアーチになつた下を潜くぐつたら不思議な音はもう切れ切れじゃなくなつた。

そこで二人は元氣を出して上着の袖そでで汗あせをふきふきかけて行つ

た。

そのうち音はもつとはつきりして来たのだ。ひよろひよろした
 笛ふえの音も入っていたし、大喇叭おおらっぱのどなり声もきこえた。ぼくは
 はみんなわかつて来たのだよ。

『ネリ、もう少しだよ、しっかり僕ぼくにつかまっておいで。』
 ネリはだまってきれで包んだ小さな卵形の頭を振って、唇を嚙か
 んで走った。

二人がも一度、樺の木の生えた丘おかをまわったとき、いきなり眼め
 の前に白いほこりのぼやぼや立った大きな道が、横になっている
 のを見た。その右の方から、さっきの音がはつきり聞え、左の方
 からもう一ひとかたま団だまり、白いほこりがこっちの方へやって来る。ほ

こりの中から、チラチラ馬の足が光った。

間もなくそれは近づいたのだ。ペムペルとネリとは、手をにぎり合つて、息をこらしてそれを見た。

もちろん僕もそれを見た。

やつて来たのは七人ばかりの馬乗りなのだ。

馬は汗をかいて黒く光り、鼻からふうふう息をつき、しずかにだくをやつていた。乗つてるものはみな赤シャツで、てかてか光る赤革あかかわの長靴ながぐつをはき、帽子ぼうしには鷲さぎの毛やなにか、白いひらひらするものをつけていた。鬚ひげをはやしたおとなも居れば、いちばんしまいにはペムペル位の頬ほほのまつかな眼のまつ黒なかあいい子も居た。ほこりの為にお日さまはぼんやり赤くなつた。

おとなはみんなペムペルとネリなどは見ない風して行ったけれど、いちばんしまいのあのかあいい子は、ペムペルを見て一寸^{ちよつと}唇に指をあててキスを送ったんだ。

そしてみんなは通り過ぎたのだ。みんなの行った方から、あのいい音がいよいよはつきり聞えて来た。まもなくみんなは向うの丘をまわって見えなくなつたが、左の方から又誰か^{またれ}ゆつくりやつて来るのだ。

それは小さな家ぐらいある白い四角の箱^{はこ}のようなもので、人が四五人ついて来た。だんだん近くになつて見ると、ついて居るのはみんな黒ん坊で、眼ばかりきらきら光らして、ふんどしだけして裸足^{はだし}だろう。白い四角なものを囲んで来たのだけれど、その白

いのは箱じゃなかった。実は白いきれを四方にさげた、日本の蚊帳やのようなもんで、その下からは大きな灰いろの四本の脚あしが、ゆつくりゆつくり上ったり下ったりしていたのだ。

ペムペルとネリとは、黒人はほんとうに恐こわかったけれど又面おも白しろかった。四角なものも恐こわかったけれど、めずらしかった。そこでみんなが過ぎてから、二人は顔を見合せた。そして

『ついて行こうか。』

『ええ、行きましょう。』と、まるでかすれた声で云ったのだ。そして二人はよほど遠くからついて行った。

黒人たちは、時々何かわからないことを叫さけんだり、空を見ながら跳はねたりした。四本の脚はゆつくりゆつくり、上ったり下つた

りしていたし、時々ふう、ふうという呼吸の音も聞えた。

二人はいよいよ堅かたく手を握にぎつてついて行つた。

そのうちお日さまは、変に赤くどんよりなつて、西の方の山に入つてしまい、残りの空は黄いろに光り、草はだんだん青から黒く見えて来た。

さつきからの音がいよいよ近くなり、すぐ向うの丘のかげでは、さつきのらしい馬のひんひん啼なくのも鼻をぶるると鳴らすのも聞えたんだ。

四角な家の生物が、脚を百ぺん上げたり下げたりしたら、ペムペルとネリとはびっくりして眼を擦こすつた。向うは大きな町なんだ。灯ひが一杯いっぱいについている。それからすぐ眼の前は平らな草地にな

つていて、大きな天幕テントがかけてある。天幕は丸太で組んである。まだ少しあかるいのに、青いアセチレンや、油煙ゆえんを長く引くカンテラがたくさんともつて、その二階には奇麗きれな絵看板がたくさんかけてあつたのだ。その看板のうしろから、さつきからのいい音が起つていたのだ。看板の中には、さつきキスを投げた子が、二疋ひきの馬に片つ方ずつ手をついて、逆立さかだちしてる処ところもある。さつきの馬はみなその前につながれて、その他ほかにだつて十五六疋ひきならんでいた。みんなオートを食べていた。

おとなや女や子供らが、その草はらにたくさん集つて看板を見上げていた。

看板のうしろからは、さつきの音が盛さかんに起つた。

けれどもあんまり近くで聞くと、そんなにすてきな音じゃない。ただの楽隊だったんだい。

ただその音が、野原を通って行く途中、とちゆうだんだん音がかすれるほど、花のにおいがついて行ったんだ。

白い四角な家も、ゆっくりゆっくり中へは行って行ってしまった。

中では何か細かい高い声でないた。

人はだんだん増えて来た。

楽隊はまるで馬鹿のように盛んにやった。

みんなは吸いこまれるように、三人五人ずつ中へは行って行ったのだ。

ペムペルとネリとは息をこらして、じつとそれを見た。

『僕たちも入つてどうか。』ペムペルが胸をどきどきさせながら云つた。

『入りましょう』とネリも答えた。

けれども何だか二人とも、安心にならなかつたのだ。どうもみんなが入口で何か番人に渡す^{わた}らしいのだ。

ペムペルは少し近くへ寄つて、じつとそれを見た。食い付くように見えていたよ。

そしたらそれはたしかに銀か黄金^{きん}かのかけらなのだ。

黄金をだせば銀のかけらを返してよこす。

そしてその人は入つて行く。

だからペムペルも黄金をポケットにさがしたのだ。

『ネリ、お前はここに待つといで。僕一ちよつと寸うちまで行つて来るからね。』

『わたしも行くわ。』ネリは云つたけれども、ペムペルはもうかけ出したので、ネリは心配そうに半分泣くようにして、又看板を見ていたよ。

それから僕は心配だから、ネリの処に番しようか、ペムペルについて行こうか、ずいぶんしばらく考えたけれども、いくらそこらを飛んで見ても、みんな看板ばかり見えていて、ネリをさらつて行きそうな悪漢は一人も居ないんだ。

そこで安心して、ペムペルについて飛んで行った。

ペムペルはそれはひどく走ったよ。四日のお月さんが、西のそらにしずかにかかっていたけれど、そのぼんやりした青じろい光で、どんどんどんペムペルはかけた。僕は追いつくのがほんとうに辛つらかった。眼がぐるぐるして、風がぶうぶう鳴ったんだ。樺かばの木も楊やなぎの木も、みんなまつ黒、草もまつ黒、その中をどんどんどんペムペルはかけた。

それからとうとうあの果樹園にはいったのだ。

ガラスのお家が月のあかりで大へんなつかしく光っていた。ペムペルは一寸立ちどまってそれを見たけれども、又走つてもうまつ黒に見えているトマトの木から、あの黄いろの実のなるトマトの木から、黄いろのトマトの実を四つとった。それからまるで風

のよう、あらしのように汗と動悸どうきで燃えながら、さっきの草場にとつて返した。僕も全く疲つかれていた。

ネリはちらちらこつちの方を見てばかりいた。
けれどもペムペルは、

『さあ、いいよ。入ろう。』

とネリに云つた。

ネリは悦よろこんで飛びあがり、二人は手をつないで木戸口に來たんだ。ペムペルはだまって二つのトマトを出したんだ。

番人は『ええ、いらつしやい。』と言いながら、トマトを受けとり、それから変な顔をした。

しばらくそれを見つめていた。

それから俄にわかに顔が歪ゆがんでどなり出した。

『何だ。この餓鬼がきめ。人をばかにしやがるな。トマト二つで、この大入の中へ汝おまえたちを押し込こんでやってたまるか。失せうやがれ、ちくしょう畜生。』

そしてトマトを投げつけた。あの黄のトマトをなげつけたんだ。その一つはひどくネリの耳にあたり、ネリはわつと泣き出し、みんなはどつと笑ったんだ。ペムペルはすばやくネリをさらうように抱だいて、そこを遁にげ出した。

みんなの笑い声が波のように聞えた。

まっくらな丘の間まで遁にげて来たとき、ペムペルも俄かに高く泣き出した。ああいうかなしいことを、お前はきつと知らないよ。

それから二人はだまってだまってときどきしくりあげながら、ひるの象について来たみちを戻もとった。

それからペムペルは、にぎりこぶしを握りながら、ネリは時々唾つばをのみながら、樺の木の生えたまつ黒な小山を越こえて、二人はおうちに帰ったんだ。ああかあいそうだよ。ほんとうにかあいそうだ。わかつたかい。じゃさよなら、私はもうはなせない。じいさんを呼んで来ちやいけないよ。さよなら。」

斯こう云つてしまふと蜂はちすずめ雀すずめの細くちばしい嘴くちばしは、また尖とがつてじつと閉じてしまい、その眼は向うの四し十じゅう雀からをだまって見ていたのです。私も大へんかなしくなつて

「じや蜂雀。さようなら。僕又来るよ。けれどお前が何か云いた

かつたら云つてお呉れ。さよなら、ありがとうよ。蜂雀、ありがとうよ。」

と云いながら、鞆かばんをそつと取りあげて、その茶いろガラスのかけらの中のような室へやを、しずかに廊下ろうかへ出たのです。そして俄かにあんまりの明るさと、あの兄妹のかあいそうなのとに、眼がチクチクツと痛み、涙なみだがぼろぼろこぼれたのです。

私のまだまるで小さかったときのことです。

青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年3月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

黄いろのトマト

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>